

# 第55回 中国・四国中学校長研究 大会 島根大会 第3分科会B

## 『PBIS（倉敷モデル）で目指す 開発的生徒指導の実践』

岡山県倉敷市立西中学校 松本 一郎

### 1 はじめに

本校は、学区にJR倉敷駅を有する倉敷市中心部の大規模校である。生徒・教職員合わせて約1,000人が、築80年を超える二階建て木造校舎で学校生活を送っている。校舎は旧岡山青年師範学校として建築された歴史があり、木造ならではの温かさで生徒を包み、地域の誇りでありシンボルとなっている。

### 2 生徒指導観の転換

#### (1) 問題対処から開発的生徒指導へ

問題処理的生徒指導（治療的生徒指導）の限界が指摘されて久しい。問題が起きてからの後追いの生徒指導は、学校に対して解決の責任を重く問われる。何件もの問題が同時並行的に起きると、対応は困難さを増し長時間に及び教職員は疲弊し、それが新たな問題の原因となり悪循環を生む。

そこで求められているのが、積極的生徒指導の重要性である。一つは、早期発見・早期対応を基本とする予防的生徒指導（未然防止的生徒指導）である。例えば、アセスやQ-Uなどのアセスメントツールを活用して、生徒のスクリーニングを行い、早期に個別対応を行ったり、学級集団への適切な介入を行ったりすることで、生徒の適応を改善し、問題を未然に防止する。

さらに近年では、もう一歩進んだ開発的生徒指導が注目されている。学級活動や生徒会活動を中心に、生徒主体の様々な活動を行うことによって、生徒指導の三機能（自己決定の場を与える、自己存在感を育成する、共感的人間関係を形成する）を活用し、自己指導能力を高める取組が、様々な手法により全国で行われ、成果を挙げている。

#### (2) 百花繚乱の開発的生徒指導

開発的生徒指導の内容をしてみると、百花繚乱の感がある。構成的グループ・エンカウンター、グループワークトレーニング、ピアサポート、コーチング、解決志向アプローチ、アドラー心理学を応用したクラス会議、SEL（社会性と情動の学習）、ソーシャルスキル・トレーニング、アンガーマネジメントなど、枚挙に暇がない。

そのような中で、近年、本県においても注目され、本市中学校長会で研修会を開催する（平成29年、30年）とともに、市内小中学校に実践が広がっているのが、ポジティブな行動支援（PBIS：Positive Behavioral Interventions and Supports）である。（以下、PBISという。）

### 2 PBIS（倉敷モデル）の概要について

#### (1) PBISとは何か？

本校では、平成31年4月から「ポジティブな行動支援」に取り組んでいる。これは、米国発祥の応用行動分析学を理論的ベースとした多層支援モデルの包括的生徒指導の考え方であり、米国では、現在、26,000校以上で実践され成果を挙げている。

PBISの基本的理論には、ABC分析という行動分析の考え方を応用している。目標とする行動（B）に対して、目標行動を具体的に分かりやすく丁寧に教え（A）、少しでも目標行動（B）ができれば認める・ほめるなどの強化を行い（C）、一連の（A）⇒（B）⇒（C）をうまく回すことにより、適切な行動を強化し改善する。

#### (2) 解決志向アプローチとは何か？

20世紀最大の心理臨床家と言われた精神科医ミルトン・エリクソンの技法が、スティーブ・ド・シェイザーらによって整理され、ソリューション・フォーカスト・アプローチ（SFA）、解決志向ブリーフセラピー、解決志向アプローチなどと呼ばれる一連の心理療法となっている。

過去よりも未来に焦点を置くこと、問題を追及するよりも解決に焦点を当てること、人は解決のための力（リソース）を備えているので、それを使えるように支援すること、一見、本人にとってマイナスに思えることでも、使えるものは何でも使うこと（ユーティライゼーション）などの特徴がある。

#### 【参考】

##### 問題対処的対応が効果的な例

いじめ・窃盗・暴力行為など、事実関係を明らかにして、被害者・加害者に説明し、対応する場合など。

警察や児童相談所等と連携し、児童自立支援施設等の処遇を図る場合など。

#### 【問題対処・解決志向・PBI Sの視点】

(3) PBI Sの一次的支援と解決志向アプローチを融合したPBI S（倉敷モデル）

##### 問題対処的発想の特色

不適切な行動（問題点）に着目  
問題の原因を追究（過去と責任中心）  
問題への対応（罰・禁止事項中心）  
減点法→自損感情を高める場合もある  
失敗の責任追及（なぜできないのか？）

##### 解決志向的発想の特色

適切な行動（例外・できている）に着目  
将来の望む解決像を追究（未来志向）  
解決への対応（認める・ほめる・励ます）  
加点法→自尊感情を高める  
成功の責任追及（なぜできるのか？）

##### PBI S的発想の特色

適切な行動を具体的に教え、評価する  
適切な行動を強化し増やすことで、結果として、不適切な行動が減る  
罰や脅しを使わない（人間尊重の精神）  
行動の結果、得ているものは何か？  
人の行動は必ず改善することができる

PBI S（倉敷モデル）は、平成30年から2年間をかけて、「ポジティブな行動支援によるいじめの未然防止」をテーマに、倉敷市教育委員会人権教育推進室が開発した

人権教育の考え方である。この詳細は、同室のホームページに冊子を公開している。

開発の具体的なコンセプトは、開発的生徒指導の視点に基づき、どの学校・学級からでも、現在ある資源（リソース）等（今まで実践してきた諸活動等）を活用して、簡単に準備できて、効果があり、教員の個性で応用が広がり、失敗しても副作用がない方法・考え方を実現することにある。

#### 4 本校のPBI S（倉敷モデル）の実践

(1) 実践のスタートは着任時から

校長としての実践のスタートは、平成31年4月2日の職員会議からになる。しかし、時間をかけて、このことについて説明することもできず、また、実践についての組織を立ち上げることもしなかった。校長の実践としては、始業式の言葉にPBI S（倉敷モデル）の考え方を取り入れて行った。壇上に立ち、礼をし、顔を上げて全校生徒を見渡した。「皆さん、すばらしい。姿勢もよく、私の話を聞こうという熱い視線を感じます。私は校長として、こんなにうれしいことはありません。」と言うと、生徒たちの顔がいつそう上がる。毎回、話の内容には解決志向のテーマを盛り込んでいる。

(2) グッドビヘイビアチケットをスタート

PBI S（倉敷モデル）を本格的に始めるため、6月の職員会議で職員研修の時間を約30分とり、校長がPBI S（倉敷モデル）の概要について、パワーポイントを使って説明した。同時に、ワークショップとして、その場で教職員が互いに感謝の言葉をグッドビヘイビアチケット（以下、GBチケット）に書いて交換した。その時のチケットを1年以上たっても、机に挟んでいる教員もいる。人は自分のよいところや感謝の言葉が書かれたカードを手放せないものである。

職員会議では、「同じ行動をしても、もらえない生徒がいれば、生徒の不公平感を助

長するのではないか。」「よいことではあると思うが、〇〇の場合はどうなるのか・・・」と、遠回しに負担感を意図する意見もあった。しかし、ノルマや強制はないこと、始めるにあたって校長が説明文を作成し、担任が学級で説明すること、何か保護者からの話があったらすべて校長が対応することを確認し、7月1日から生徒の適切な行動に対して教職員が書いて渡すGBチケットをスタートした。

初め、3種類×1,000枚で3,000枚のGBチケットを印刷し、スタートした。原画は、美術部の生徒から募集した。その中から3種類を選んで作成した。校長は、刷り上がったGBチケットの最初の3枚は、それぞれデザインをしてくれた3名の生徒に感謝の言葉を書いて渡した。



初任者をはじめ、若手の教員にGBチケットの親和性が高く、活用は校内に広がった。校長は、教職員にも書いた。正確にカウントしているわけではないが、私は、年間、200枚程度は生徒・教職員に書いたと思う。3,000枚のGBチケットが、10月には底を尽きかけたので、別デザインのものを、3種類×1,000枚で3,000枚、追加で印刷した。

### (3) 西中ナンバーワンシールの活用

GBチケットをたくさん書くことは、教職員にとっても負担でもある。データの活用というPBISの基本的な考え方を実践に生かすため、「西中No.1シール」を作成した。4枚のシールで校章が浮き出てくる。これは、応用行動分析学をもとにしたトークン・エコノミーの考え方を取り入れ

たものである。

PBIS（倉敷モデル）は、PBISの一次的支援であるが、二次的・三次的支援へと広げていくために、特別支援学級（二次的支援を想定）での実践に「No.1シール」を活用することにした。

令和元年度の特別支援学級（第1学年）で、授業態度を向上させる取組として担任に趣旨を説明した。原理が腑に落ちれば、実践のヴァリエーションは無限である。センスのある担任が、具体的な方法を考えた。授業担当者が授業連絡カードに、授業の振り返りとして花丸を付けてくれると、シールが一枚もらえる。まず、クラスで200枚を集めようと始めた。令和2年1月のことである。目標の200枚は完成し、400枚目を目指している途中で、新型コロナウイルス感染症拡大のため、臨時休校に入ってしまった。2学期の途中まで、何かと混乱することが多い学級であったが、この取組を始めて、教科担任からも褒められることが多く、落ち着いて授業を受けることができるようになった。

### (4) 生徒会のGBチケット

「私たち（生徒）が書くことができるGBチケット」を、生徒会が主催して令和2年7月からスタートした。まず、生徒会執行部と専門委員長が、一人4枚のGBチケットを書いた。それをもとにポスターを作り、掲示するとともに、生徒会だよりで趣旨を広報して、全校生徒に呼びかけた。

チケットが可視化されることによって、二つのデータが具体化される。一つは、チケットの量が増えることである。これは量的データの可視化になる。もう一つは、そこに書かれた内容を生徒が読むことである。これは質的データの可視化になる。ポジティブ行動支援におけるデータの活用が、生かされる取組となる。この取組を続けることによって、よい行動へのハードルが、も

っともっと下がり、笑顔があふれる西中学校になってほしいと期待している。

#### (5) 実践の中でのエピソード

初任者のA教諭が、1学期の保護者懇談でGBチケットを全員に用意した（令和元年7月）。それを生徒と保護者に渡してから、懇談をスタートした。笑顔から懇談が始まるので、とてもポジティブな雰囲気になった。「自分は、何かと行き届かず、保護者も不満があったと思いますが、GBチケットで少し我慢してくれたのかもしれない。」

他にも、本校の通知表は、1・2学期には所見がないので、GBチケットに学級生徒全員のよいところやできているところを書き、通知表に挟んで渡している教員もいる。担任が、主体的にGBチケットという環境を有効に活用して、生徒・保護者との好ましい関係を築こうと活用している。

第2学年時は、ほとんど学校に来ることができていない状況だったBさん（令和2年度から転入）は、遅刻や早退はあるものの、ほぼ毎日、学校に来ることができている。担任のC先生に聞くと、「本人は、数学がとても好きで、授業にも積極的に臨んでいました。そのことを数学の教員から聞いて、私がGBチケットを書いて渡しました。本人も保護者も、そのGBチケットを読んで、とても喜んでくれました。GBチケットのお陰です。」と話した。（R2年5月）

### 5 「悪いことがない学校」より「よいことがいっぱいある学校」へ

現在の本校を見てみると、大多数の生徒が、適切な行動をしている。改めて、大多数の生徒が行っている適切な行動に、私たち教職員が、どれだけ愛情深く反応しているかが問われていると感じている。

櫻井茂男氏（内発的動機付け論者）も、エドワード・デシの『人を伸ばす力』（新曜社）に、「子どもたちに適切な行動を行わせようとするときには、その行動ができるようになる

ことだけに愛情を注ぐのではなく、すべての行動に愛情を注ぐことが重要である。」と述べている。

初め、GBチケットは、適切な行動を強化するご褒美として教職員に紹介した。しかし、実践を始めて一年と少しで、「GBチケットはご褒美ではない。」という考えが教職員に広がり始めている。「GBチケットは、人間の尊厳を伝え合うメッセージカードだと思う。ご褒美なら不公平感が生まれるかもしれないが、私のクラスでは、みんなで書き合っているので、みんながもらった生徒に祝福の拍手を贈ります。」GBチケットを書くことへの教職員の負担感は、このような形で克服されていくのかもしれない。

### 6 おわりに

適切な行動が増えれば増えるほど、不適切な行動の割合は減っていく。教室で適切な行動を愛情深く認めて、大多数の生徒を勇気づけ強化する中で、できていない生徒がしようとすれば、その生徒の行動もまた認めて、ほめることができる。また、生徒の適切な行動を、GBチケットを通じて保護者にも伝え、保護者の理解と協力を得て、学校での指導に生かすこともできる。

一人ひとりでできている行動やできそうな行動に着目することで、好循環のきっかけをしっかりとつかみ、適切な行動を当たり前と捉えるのではなく、「あなたはできている。」と、常に愛情をもって認めることが重要である。それが生徒の適切な行動を強化し、生徒の自尊感情を高め、生徒自身が自ら適切な行動を選択する力である自己指導能力を高める効果を生むと考えている。

私たちは、適切な行動という生きる力を身に付け、自分の将来を力強く生き抜く生徒を育てるために、今後も笑顔でPBIS（倉敷モデル）に取り組んでいきたい。